

月の花挽歌 ～7. 時の過ぎ行くままに～

7-7

取ってつけたように、ラブシーンを褒められても女優は釈然としなかったけれど、Tらしい口振りだと思って納得することにした。

女優のしぐさを見て、ピンボケの受け答えをしてしまったことに気づいたTは、「あのシーンで（本当に愛しているなら、私を殺して）と原作通りのセリフを使ったのは、脚本がストレートすぎたんじゃないかな」とまた映画人らしいことを言った。

「原作に忠実すぎるから、原作を超える映画は難しいかもしれませんね。ベストセラー小説だったらなおの事ですよ」と俳優は意識の半分を使い、訳知り顔で話に加わった。

「映画はシナリオと編集が八割で、あとは製作、演出、カメラワーク、音楽……、俳優の演技力なんぞはキャスティングが作品にハマるかハマらないか次第だからね」とTは冷ややかな声で言った。

「ちょっと待ってください。大先輩のお言葉でも、役者の端くれとして私は納得できません！長年やってこられたことを卑下なさるのですか？今、言われた演技力なんぞはからのくだりの部分を撤回してください！」と俳優は眉をひそめて言った。

ひとかどの三人の俳優がナーバスな危険水域に達しようとしている場面で、今まで置いてけぼり感が漂っていた横田が忽然と登場して「ここはひとつシャンパンでも開けて、シャンシャンと手打ちにしませんか」と地口まがいの風刺言葉で座を取りなした。

綺麗に遊ぶことが常識とされる別次元の領域で、あろうことか痴情のもつれを絵画の修復師ではあるまいし、復元しようとしている画家自身の毛細血管に、これまでにない漆黒の悪寒が走るのを感じた横田は、無謀にも錬達の役者たちの中に闖入することで解消しようとした。

知人の画家の内実など知る由もない大御所俳優は、柄にもなく小戯れたセリフ回しで剣呑な雰囲気を払拭してくれた横田に投げ銭でもしたい衝動に駆られた。

客同士ならまだしも、当の本人が絡んだ揉め事までもが重なるので、今日は厄日だと半ば諦めかけていた真紀は、降ってわいたような横田の助け舟に便乗させてもらった。

「シャンパンで手打ちにすると洒落ているねー」と大御所俳優は良く通る声で言う。

「シャンパンは、お店からの気持ちとさせてください」と真紀は、さっき横田に言ったのと同じ意味の言葉を間も置かずに添えた。